

東奥日報

2019年(令和元年)11月27日(曜日) (16)

改良続けた採譜装置 三味線の音解析

難曲「じょんがら」楽譜に

八戸

三味線民謡の「津軽じょんがら節」をピアノで演奏。八戸工業大学大学院の小坂谷壽一教授(工学研究科電子電気・情報工学専攻科)が、自身が開発した自動採譜装置を使い「津軽じょんがら節」の西洋譜面、三味線譜面を完成させた。小坂谷教授によると世界で初めて。25日、同大で公開授業を行い、ピアノ演奏が披露された。(山谷佳澄)



自動採譜装置で西洋譜面に起こした「津軽じょんがら節」をピアノ演奏する佐藤さん

開発の小坂谷教授(八工大) 公開授業

ピアノで演奏 調べ新鮮



これまでの研究の歩みを語る小坂谷教授

小坂谷教授は10年ほど前から装置を研究してきた。邦楽音楽は口伝による継承が多く「間違っただまま伝わっていることもあり、演奏者が亡くなると曲が途絶えてしまうこともある」と危惧し、装置を開発。改良を続け、難曲「津軽じょんがら節」を西洋譜と三味線譜に起こすところまで到達した。

授業で小坂谷教授は、スライドや映像でこれまでの研究をたどりながら装置について説明。奏者が採譜用のエレクトリック三味線を弾くと、コンピューターが音をとりえ、三味線譜や西洋譜に書き出す。「津軽じょんがら節」を八戸市出身のピアノリスト佐藤慎悟さんが演奏すると、集まった学生らは初めて聞く音色に聞

き入った。佐藤さんは「今までにないチャレンジ。今度のは生の三味線とコラボレーションしてみたい」と話した。

装置の開発により、伝統音楽の保存につながるほか、西洋楽器と邦楽楽器のコラボレーションにも可能性が生まれた。小坂谷教授は今後「口ずさんだ曲を譜面化する声の譜面化、東南アジアの民族音楽の譜面化に取り組む」と語った。